



雑多に歪んだ  
めるへん小説よせあつめ

ARICE

不完全版 お試し用

雑多に歪んだめるへん小説よせあつめ

АЯІСЕ 不完全版

お試し用

日向豊光

※【新約△アリス】の第三話までが読めるお試し版として編集したものです。

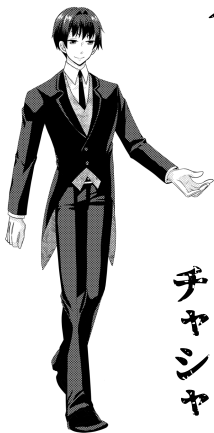
※この物語はフィクションです。実在する人物・団体・事件等には一切関係ありません。

※誤字脱字には十分気をつけてはおりますが、全く無いとは云い切れません。また、話の内容・設定・矛盾・その他の細かい部分、及び、物語の都合上、わざと描写を支離滅裂にしていたり、文脈の意味を分かり難くしている部分をはじめとした本書の文体そのものが氣にくわない等々の事柄を含め、本書がご不要になりました際には、削除してください。

# 登場人物



アリス



チャシヤ

これは何の変哲もなく面白味もない何処にでも存在する世に有り触れた話の一つ

# 新約△アリス

## 序

石畳が何処までも続く広場。

この場の主のように鎮座する断頭台。

断頭台の周りに転がるは、夥しい量の字、字、字、字、字。

世界中に存在するであろう、ありとあらゆる字だ。

だが、どの字も例外なく断頭台に切断されたかのように、真つ二つになって石畳の上で転がっている。

その字に埋もれるようにして、字以外のものが一つ、転がっていた。

それは、ニンゲンの首。

胴体がくっついていていた時には腰まで伸ばされていたのだらうと解る黒髪のでっぺんに、ベロア地で出来た黒く大きなリボンを結び、愛らしいと表現するに相応しく人好きのする容姿をしている者の、首。

その首に浮かぶ表情に苦悶の色はなく、安らかに眠っているかのようだ。

そこへ、ヒトのカタチをした白い闇の塊が一つ現れた。

暫くの間、広場を眺めるような仕草をした後、白闇はゆっくりと動き出す。

白闇は、何かを探しているらしい。

切断された字を一つ一つ確かめ、探し求めているものではないと解ると、乱暴にそれを放る。

その作業は、飽くことなく繰り返され。

白い太陽が沈み、黒い月が昇り、黒い月が沈み、白い太陽が昇ることを幾度繰り返しても終わらず、永遠に続くのではないかと思われた。

やがて。

白闇の手が、ふと止まった。

白闇の視線の先にあるのは、切断された字ではなく、首。

あの安らかに眠る愛らしい首だ。

白闇は震える手で、転がる首を拾い上げると愛おしそうに抱きしめる。

どれだけそうしていたかは解らない。

白闇は首に何言かを告げると、首を抱きかかえたまま、ゆっくりと歩き出す。足を引きずっているかのような、白闇の歩み。

ずりずりと、ずりずりと。

ずりずりと、ずりずりと。

白闇が歩いた箇所には罅のようなものが生じ、その罅を中心に、広場に鎮座する断頭台が、周囲の風景が、全てを覆い尽くす空が、何もかもが、音もなく崩れ始める。



その音を耳にした白闇が、振り向きもせずにはいた。

## 第一話

—— 現実を仮想現実にかえる虚構MMORPG // 黄金色の午後の庭・オンライン。

このゲームは、任意のデバイスにソフト、乃至、アプリをインストールし、起動するだけで、現実を一時的にはあるが、仮想現実として書き換えてしまう独自のシステムを採用している。

見慣れた何時もの風景が指先一つで、非現実へと、現実ではあり得ないファンタジー世界へと、一瞬で変わるのだ。

非現実。

ここでは、現実にいる者の姿形も、非現実に合わせた者の姿形へと変わる。

強者は弱者に。

弱者は強者に。

現実は夢に。

夢は現実には。

法と秩序で守られた世界は、無法と無秩序に溢れた世界に。

無法と無秩序で溢れた世界は、法と秩序で守られぬ世界に。

そこに現世の理はなく。

全てが理不尽と不条理と矛盾と、不条理と理不尽と矛盾で出来ている。

それは、全てが嘘偽りのフェイクだからこそ出来ることであり、それこそが、このゲーム最大のウリである。

しかし、だからと云って、他のMMORPGと全く違うわけでもない。

何せ、運営会社は集客の為か、それとも既に居る顧客の為か、今日も今日とて、何かしらのイベントを実施している。

それは、ログインするだけで仮想現実用のアイテムが貰えると云ったものであったり、強敵討伐イベントであったり、アイテム収集系のイベントであったりと多岐にわたるが、どのイベントにも強制参加等の義務はなく、各々好きなことを、好きなようにして過ごしているのは、どのMMORPGでも見られる風景だろう。

だが、ウリのシステムがシステムなだけに、中毒者が続出。仮想現実から現実に帰って来ない者が日に日に増え続け、社会問題になりつつある。

だが、運営側や、ゲームを実際にプレイしている者にとって、そんなことは何処吹く風。

現実では地方都市の駅前広場と、その周辺に乱立するビル群として存在し。

仮想現実では、各地へのワープ地点として活用されているポータル広場前の、ビルの森として存在する場。

此処は、何時如何なる時でも、人が絶えない場所で、仲間との待ち合わせや、冒険者向けの商売に情報収集、クエストへ出発する為の臨時人員集め等々の看板が処狭しと乱立している。

そんな風景を、とあるビルの屋上から見下ろしているのは、二つの影。

一つは、腰まで伸ばされた黒髪のでっぺんにベロア地で出来た黒く大きなリボ

ンを結び、ロング丈の黒地のワンピースにシンプルな白地のエプロン——所謂、黒いエプロンドレスを身に纏い、愛らしいと表現するに相応しく人好きのする容姿をした、金色の双眸を持つ少女、にしか見えない者。

もう一つは、闇で作ったのかと思われる黒よりも黒が濃いローブを身に纏った長身の者である。が、フードを目深く被っている為に、容姿については解らない。寄り添うようにして立つ二人の身長差は、お互いの頭二つ分と云ったところか。

「見ろよ、チャシャ」

と、眼下を指さす少女擬きの口から漏れたのは、少女のものであるとも、少年のものであるともとれる、魅力的な声音。

その声音に、

「はい」

と、応えた声は青年の声は、抑揚が無く、その所為で感情と云われるものですら全く見えないものであった。

が、そうした声音を気にすることなく、

「文明の利器ってのは、ホント便利だよな。現実から目を背けた何も知らないシ

ロウサギ候補が、こんなにも集まりやがってくれてるんだからよ」  
くっくっくと喉を鳴らして笑う少女擬きの口元は、美しく歪んでいる。

「アリス」

相変わらず抑揚のない声が、少女擬き——アリスの名を、窘めるよう口にした。

「あんだよ？」

チロリと、アリスは青年——チャシャを見やる。

チャシャは、アリスを見返すこともなければ、何も口にしない。

だが、アリスにはチャシャが口にしうとしてしていることが、解るらしく、

「相変わらず、お前は『シロウサギ』が嫌いなんだな」

と、大きな溜息を吐くと、

「でもな、今回ばっかは諦めろよ、チャシャ。何せ、ニンゲンどもが俺達のセカイに土足で入り込んだ挙げ句、好き勝手に弄くっつけてくれる所為で、今じゃあちこち、何処のセカイも、セカイそのものが滅茶苦茶になっちまってる。ここらで一、二回、セカイを元に戻さなきゃ、俺らのセカイはどんどん歪んで狂い続けて原型を無くして、そのうち俺らが俺らですら居れなくなっちまう。で、そうならねえよ

ーにするのによ、俺達の世界に適合するニンゲンであるシロウサギが必要不可欠になる。そのシロウサギを探す為に、殿が頑張つてニンゲンのセカイに、わざわざこつちから浸食してやるシステムを創り上げてくれたんだから、その苦勞を無にするわけにやあ、イカンのだよ」

「承知しております」

「お前の場合、承知してるだけ、だろ」

アリスは苦笑いに良く似た表情を浮かべると、チャシャから視線を外し、  
「取り敢えず、だ」

そのまま視線を駅前広場の人集りに向け直す。

「ウチんとこのシロウサギは一匹で良いからな。残りは、この間の礼にスノウとか、赤の字への線香代にスペシアル・ハンターとか、後、灰のことか、ヘングレ姉弟だののところに、熨し着けて押しつけてやるとして、っと」

それにしたって多いなと、

「チャシャ」

間引け、と云う言葉を出さず、アリスがチャシャに目配せをすると、

「よろしいのですか？」

チャシャは首を傾げるような仕草こそ見せないものの、抑揚のないあの声で確かめるように訊ねた。

「わざわざ確かめるようなことかよ」

アリスは苦笑いを浮かべ、好きにしろと云いそうになったが、はたとした様子でその言葉を呑み込み、

「あ！ 最低でも、一匹は残せよ」

この間みために全滅はさせるなど、釘を刺すよう慌てて返せば、

「承知致しました」

と、チャシャ。

返事をしたのが先であったのか、はたまたビルの屋上から音もなく飛び降りたのが先だったのか、チャシャの姿が消えると同時に、ポータル広場から、悲鳴と血飛沫が上がりはじめ、

「ちよ、チャーシャー!? お前、俺の話、ちゃんと聞いてたんだろーなー?!」

アリスはそう云いながらも、ビルの屋上から地上の様子を眺めているだけだっ



た。

×

×

×

広場に居た者にとって、それは突然の出来事だった。

空から何かが降って来たことに誰も気付かず、気付いた時には、あちらこちらから悲鳴が上がっていたのだ。

すわ、運営側が用意していたイベント用のモンスターが発生したのか、と、思った者も居たようだが、イベント用のモンスターは集客力も然る事乍ら、技術的な問題も発生しやすいとのことで、街中には現れないことになっている。

それに、そうしたトクベツなイベントがある際には、予め告知がされる。

では、誰かが、モンスター召喚用のアイテム——通称、『テロの箱』を使って、モンスターを呼び出したのだろうか。

後者であれば、日に数回はあることだ。

仲間内だけで遊んでいたところ、運が良いのか悪いのか、俗に云う『ボス・モ

ンスター』が召喚されてしまい、どうにも対処が出来ず、周囲に居る者を問答無用のまま巻き込んでしまうことは、よくあること。

こうした出来事に巻き込まれた場合、戦えない者は文句を云いながらその場から去り、戦える者は経験値とドロップアイテムを目当てに、多少の罵詈雑言を口にしながらか戦に参加するのだ。

だが、今日は違っていた。

誰も彼もが純粹な悲鳴を上げて、四方八方に逃げていく。

空から降ってきた『何か』の着地点近くに居た者や、物珍しさから『何か』の正体を確かめようと武器を握り、その『何か』に挑んだ者達は、悉く四肢を切断され、肉片と血を周囲に撒き散らしながら、地へと転がる。転がされる。

このゲームでは、何らかの理由で『死亡』した場合、装備品の効果や甦生系の呪文やアイテムを用いれば、その場での即時再開リスボーンが可能となっているが、そうした物を持っておらず、呪文等々による手助けも出来ない・されない場合は、光るエフェクトと共に一旦身体が消え、近場の再開地点に移され、そこからの再開リスボーンとなる。

だから、と云うわけではないが、敵に斬られたり、殴られたりしても、残酷な描写はなく、ただの効果音だけで済まされて終わるはずなのだ。

それなのに、と。

誰かが、叫んだ。

頭のおかしいP プレイヤー K野郎が出た、と。

P Kが可能なゲームにおいて、それをする者の殆どは、周囲に敵意を持っており、己のナニカを満たす為にやっているとされているのだが、それはやっている本人にしか解らぬことである。

と、云うことはさておいて。

P Kが可能な場所は、現実ではスポーツと公園と云われる場所や、それが出来るところとだけと云われているのだが、それはただの暗黙ルールとなっているだけであり、実際に出来ないわけではない。

だから極稀に、街中でもこうしてP Kが行われることがある。

ただその際は有志が立ち上がり、ルールに違反した者を返り討ちにし、何事もなかったかのように日常を取り戻して終わるのだが、今回は一筋縄ではいかないよ

うで、こんな叫び声が聞こえてきた。

このPKはチーターで、凶悪なウィルスをバラまいている、と。

そのウィルスに感染したら云々、と。

実際にあり得そうな出来事で、ゲームをプレイしている者にとっては恐怖ではない言葉を鵜呑みにし、皆逃げ惑っているらしい。

だが、そうして逃げ惑うのも仕方の無いことだ。

何せ、現実には『タイセツなもの』が何もないと、そこに愛着を持たず斜に構えている者程、非現実には『タイセツなもの』が幾つもあり、そこに愛着を持ち素直に生きているものなのだ。

此処は現実でないから、全てを失い零の状態から簡単にやり直せるとしても、それが辛いと云う者は多く、実際にソレを経験した者の多くは目の前の非現実から離れ、別の非現実へと移って行ってしまっているので、運営はそうしたことにならないようにと、細心の注意を払っている、はず、なのだ。

それなのに。

やがて、悲痛な叫び声は一つ残らず消えた。

地に転がる四肢の山は、草に変わり、木に変わり、血溜まりは無色透明の液体となり、土に吸収され、ビルの森には何処から生えてきたのか蔦に覆われ。

ポータル広場だったこの場は、あつと云う間に緑に覆われた場に――、例えるなら、現世に生きているニンゲンが滅び、文明が崩壊した後、地上にある物はこゝなるであろうと云われているような、そんな風景に変わる。

「ふむ」

ポータル広場のシンボルである噴水の上に立ち、そこからぐるりと周囲を見回したのは、チャシャである。

実はこのチャシャ、ビルの屋上から飛び降りた後、この噴水の上に着地するなり、アリスに云われたことを早々に実行していたわけだが、一体どんな術を使つて、このような惨事を引き起こしたのか。

「やり過ぎましたかね」

ぼつりとこう呟いたのは、アリスに『一匹は残せ』と云われたのに、見た限り

一匹も生存者が残っていないさそうだからだろう。

ただ、こうして呟かれた声には相も変わらさず抑揚がない為、一切の感情が読み取れないので、本当にやり過ぎたと思っているのかどうかは解らない。

「……まあ、数時間後には、この代わりの者共が害虫のように復活することですし」

と、独り言を呟いていたチャシヤが、ふとした様子で噴水の丸い水瓶の縁に目を向けたところ、その縁の蔭に隠れるようにして身を丸め震えている一つの影があることに気が付いた。

それを見て何を思ったのか、短く小さい息を吐き出したところ、

「チャーシヤー!!」

と、怒鳴るようなアリスの声が、頭上から聞こえてきた。

あの声は、云いつけを守らなかつたと勘違いし怒っているものだなと、チャシヤはアリスの居る屋上を見上げる。

実際、チャシヤの思っている通りなのだろう。

「っの、馬鹿！」

そんな言葉と共に、白地に赤いフリルの着いた日傘らしき物を広げたアリスが、ビルの屋上から飛び降りる姿が見えた。

屋上から飛び降りる、なんてことを現実で行えば大惨事となるが、ここは非現実。

アリスが手にしている日傘には、非現実に対応しい効果が付与されているのだろう。

日傘を片手に物理法則を完全に無視し、ふわりふわりとゆるやかに落下し続けていたアリスは、音もなく噴水の水瓶の縁に着地すると、

「馬鹿チャシャ!!」

直ぐさま日傘を畳み、

「一匹は残せて云っただろー!?!」

こう云いながら、両手で持つ武器よろしく勢いよく日傘を振り回したわけだが、その勢いがあまりにも良すぎたのかバランスを崩し、水瓶の縁から足を滑らせてしまう。

「あ」

やっべ、と、眩いた時には、雑草の生えるアスファルトの上に尻餅をついて座り込み、イタタと尻をさすっている——はずだったのだが、その身は何時の間にやら、傍らに立つチャシャに支えられていた。

「お怪我は？」

と、訊ねるチャシャに対し、

「ないっ！」

大丈夫だと答えたアリスは、直ぐにチャシャから離れると、その場で仁王立ちをして見せた。

「アリス」

「あんだよ？」

自分の云い付けを守らなかったことに対する云い訳をするつもりなら聞いてやると、アリス。

しかし、チャシャの口から出た言葉は、「その日傘は、どうしたのですか？」

と、アリスが手にしている日傘は自分が見たことのない物だと、何処で手に入れたのかと云うことを、アリスに問うものであった。



このタイミングでその質問かと、アリスは思わず呆れたような表情を浮かべてしまう。

だが、長い月日を共にしているチャシヤに、否、自分アリスのこととなると、何でも把握していないと気が済まない相手チャシヤに、そんなことどうでも良いだろう……なんて、口にすれば、どうなるかは火を見るより明らかかなことなので、

「白と赤の双子女王姉妹から貰ったんだ。俺は肌が白いから、日焼けしないように使えってさ」

こう素直に答えると、

「そうですか。やはり暴力姉妹は腐っても女王と云うことですね。女王の名を持つ者に相応しくセンスだけは素晴らしい。とても良く似合っていますよ、アリス」

と、若干不満そうにアリスを褒めた。

因みに、チャシヤが明らかに不満を覚えている原因は、自分からではなく他人から送られた物を、アリスが使っている所為である。

「なんかあの二人に対して、さらりと暴言吐いてないか、お前」

「気のせいです」

「じゃあ、そう云うことにしといてやるから話を元に戻そうぜ」

「元には、とは？」

「お前ねえ」

トボけるんじゃないと頬を膨らませるアリスが何を云わんとしているのか、それが解らぬチャシヤではない。

アリスに云われた通りのことをしたはずが、広場に居た者達を一人残さずバラしてしまった——と、自分でも思っていたのだ。噴水の水瓶の縁、その蔭に潜み丸まっている人影を見つけるまでは。

とは云え、チャシヤがそのことに気付いても、アリスが居た場所からこの人影に気付けるわけがなく、

「人っ子一人残ってねえじゃねえか、この馬鹿！」

馬鹿莫迦バカばーか！と、アリスはチャシヤに詰め寄る。

思った通りのアリスの言動に、チャシヤがフードの下にある顔を僅かに綻ばせたのは、束の間のこと。

「アリス、そのことですが」

噴水の水瓶の縁の蔭を見て欲しいと云うように、そこを指さして見せた。

「あ？」

そこに何かがあるのかと、アリスが素直にチャシヤの指先を辿ったところ、噴水の水瓶の縁の蔭に潜み丸まっている人影に気付く。

「一人は」

残っていた、と。

残しました、と、チャシヤは言葉に出さずに云う。

「ただの偶然だろ」

絶対にと、アリスが人影に向かってしゃがみこんだところ、空気に溶けるようにしてチャシヤの姿が消えた。

そんなチャシヤに、アリスは視線すら向けることなく、

「おい」

と、未だ震えている人影に声を掛けた。

人影は応えようとしなかったが、根気よく声を掛け続けたところ、漸く身を起

こして、こちらに視線を向けた。

非現実の中に入る際、だいたいのは己を良く見せようと、仮初めの姿に己の美意識を反映し、所謂『美』と云う言葉が冠に着く容姿をしている者が多いのだが、今アリスに視線を向けている者は、良くも悪くも『普通』で、それこそ『モブ』と称されるに相応しい当たり障りがなく目立たない二十歳前後の青年男子と云った容姿をしていた。服装は、現実で身に着けていても決しておかしくはない、TシャツにGパン、足下は現実で履いていても全く違和感のないスニーカーである。

ただ、アリスに向けられている目は普通ではなく、恐怖や畏れ、それと僅かな好奇心と警戒心が宿っているのが見てとれた。

アリスはこの青年を安心させる為、柔らかい笑みをその顔に浮かべると、  
「大丈夫か？」

と、出来るだけ優しい口調で訊ねたのだが、青年からの返答はなかった。

それでも、返事くらいしろだの何だのとは云わず、微笑を浮かべたまま青年からの返答を待っていたところ、

「……あ、あ。うん、大丈夫、です」  
はい、と、青年が頷いた。

それからほんの少しの間を空けて、

「あの、キミは？ キミは大丈夫？」  
と、訊いてきた。

これは、チャシヤの起こした惨状を目の当たりにし、混乱していた頭や思考、感情、その他諸々が冷静さを取り戻し、自分以外にも助かった者が居たと見ての問いなのだろうか。つまり、つい先程まで練り広げられていたアリスとチャシヤの会話は、全く耳に入っていないかつたとみて間違いない。

「俺は、大丈夫」

アリスは笑顔を絶やさずに答えた。

少女の姿をした者の一人称が『俺』であるにも関わらず、

「そう」

良かったと、一人称を気にする素振りも見せずに受け入れた青年が大きく安堵の息を吐き出したのは、現実と非現実の性別が必ずしも一致するとは限らないと

解っているからだろう。

そう、折角非現実で過ごすのだからと、現実とは違う性を選択し、その性になりきって過ごしている者なんて、掃いて捨てる程いるし。わざと異性の姿を選び、中身は現実の性別のまま過ごしている者も、ゴマンという。

また、現実では同性愛なんてと差別発言をする者でも、相手の現実での性を知りながらも非現実であればと、現実と非現実で、非現実と現実では同性同士であっても関係ないと、恋人関係になる者も、呆れてしまう程に多い。

と、云うことはさておいて。

「さっきの、ヤツは？ それに……」

この異常なまでの静けさは一体と、青年は辺りを見回した後、ギョツとした様子を見せた。

それはそうだろう。

活気が溢れていた虚実入り交じるファンタジー都市であったポータル広場は、人がこの地から居なくなつて何百、何千と云つた年月が経つたと云われても疑いようがない廃墟の森と化しているのだ。

ついでに云えば、自分と目の前に居る少女擬以外、誰も、人っ子一人居ないのだ。

普段であれば。

そう、普段であれば、たとえモンスターが街を襲撃するイベントが起こり、あちらこちらに死体が転がるような有様になったとしても、こんなに、耳が痛くなる程の静けさに見舞われるようなことは、今まで一度もなかった。

それなのに、と。

「さっきのアレだけどな」

と、アリス。

流石に、自分がチャシヤに命じて云々と云うことは口に出さず、

「アレはバグだったみたいだぜ」

『バグ』とは、童話や寓話の中に住まうイキモノをモチーフに造られたこの非現実世界を闊歩しているモンスターのことである。なので、バグの形状や名称は、誰もが一度は目にしたことがあるモノばかりである。

「バグ？」

あれが？と、青年。

あのバグは、普段目にするモノとは違う形状をしていたような、と。

それだけではなく、名も伏せられていたような、と、青年が首を捻ったのは、NPCやバグは一目でそうと解るようにと、その頭上に名称が表示されているのだが、この広場を襲ったモノにはそうした表示が無かったと覚えていたからだ。しかし、一方的な殺戮が始まって直ぐに、噴水の水瓶の縁の蔭に隠れてしまったので、偶々それが確認出来ていなかったただけなのかも知れない、と。

「突発イベント用のバグ、だったのかな」

極稀に、何の告知もなく開催されるイベントがある。

それは、シークレットイベントとか、突発イベント等と呼ばれているのだが、一切告知がされずに唐突に始まるわけではない。

このテのイベントが開始される直前になると、必ず何らかのアナウンスがされ、その流れでイベントが開始されるのだ。

また、こうしたイベントでは、普段はお目にかかれないイベント専用の特別なバグが出現することが多い。



今回もまたそうしたバグが出現し、目の前に広がる風景はイベント用の特別演出であると云うのであれば、なんとか納得することが出来る。

まあ、それにしたって、とは思うが。

「あのバグはな、そのテの正規のバグじゃなかったらしい」  
「え」

「誰かが改造して持ち込んだウイルス付きのバグだったんだとさ」  
そのウイルスの所為で、ポータル広場はこのように書き換えられてしまっているのだ、と。

また、何らかのことが原因となりウイルスが他の地区に行ってしまったぬようにと、一時的にこのポータル広場は閉鎖されていると、アリスは最もらしいことを口にする。

ここで、青年はハツとした様子で改めてアリスを見やる。

アリスは、どうしてそのようなことを知っているのかと、

「キミは、もしかしてGMさん？」

要するに、運営側のニンゲンなのかと訊ねる。

「そ」

と、アリスが頷いたのは、そうではないことを目の前に居る青年に話したところ、今は無駄なことになると解っているし、それより何より、自分の存在と、この世界についての説明をするのは、とても面倒なことであるからだ。だからこそ、今は青年の思い込みに合わせるようにして、話を進めようと決めている。

「で、俺はアリスって云うんだけど」

と、何気なくアリスが名乗ったところ、青年が云われてみればと云わんばかりに、アリスの全身を上から下まで見回した。

昨今、童話や寓話をモチーフにしたゲームは数多く創られており、この場——現実を仮想現実にカエる虚構MMORPG『黄金色の午後の庭・オンライン』も、例外ではない。

だからかどうかは解らないが、この非現実集うPLが名乗っている偽名は童話や寓話の登場人物に因んだものが多い。しかし、そんなことを抜きにしても、自分の目の前に居る『アリス』は、イメージカラーが違うだけで、どう見ても。

「アンタは？」

と、アリスが青年の名を訊ねたところ、

「しろいうさぎって書いて、白兔はくと」

青年は、こう名乗った。

「白兔、か」

青年が名乗った名を、小さく口の中で繰り返したアリスは、僅かに口元を歪めてから、

「んじゃあ、白兔。アンタ、ログアウト出来るか試してくれるか？」

「あ、うん」

白兔はもそもそと、ズボンのポケットからスマホを取り出すと、開きっぱなしのアプリ画面から「ログアウト」と書かれたキーを押す。

が、何も起こらない。

「あれ？」

何時もであれば、このキーを押すだけで否応なしに現実に戻されてしまうのに、

「あれ？ あれ？」

何度押ししても、押しても、押しても、非現実から現実に戻される際に発生するエフェクトも出ないし、僅かに感じる浮遊感もない。

「なんで？」

と、思わず白兔は溢した。

だが、その口調に驚きや焦りと云った感情は感じ取れなかった。

その代わりに感じ取ったのは、喜怒哀楽で云えば『喜』の感情。

アリスはそれに気付いたが、わざと気付かぬフリをし、

「んー、ログアウト出来ない、か。ま、アンタはバクが発生した場所の近くに居た、謂わば唯一のイキノコリだからな。そーすつとつてことで、ご足労掛けるが、このセカイを管理してる城まで行って、精密検査受けてもらっても良いか？」

何せと、アリス。

またもや尤もらしい言葉を並べ立てて口にしたところ、白兔はアリスの言葉を疑うことなく信じこんだらしく、こくりと頷いた。

「話が早くてありがたい。じゃ、これ」

アリスは何処からともなく、銀色の懐中時計を取り出して、白兔に差し出す。

「これは？」

「管理者パスみたいなものさ。それがあれば、管理側で閉鎖してる立ち入り禁止区域も、問題なく通れる」

「成る程……、お借りします」

白兎はアリスから懐中時計を受け取ると、ズボンのポケットに仕舞いこむ。

「で、俺はこれから、一仕事しなくちゃならなくてさ。アンタと一緒にいてやることが出来ないんだけど」

「こっち側の管理事務所まで行けば良いんですよ？ 大丈夫ですよ」

実際に行ったことはないが、ゲームをプレイしている者であればなんとなく知っている場所にある。

それは、そう言う場所なのだ。

「用事が終わったら、急いでアンタの後追っかけるな」

「はい」

「じゃ、この地区の出口はあちら」

アリスは、パチンと指を鳴らした——のだが、不発に終わる。

これに、むうと片頬を膨らませると、

「ああ、もう！」

カッコくらいつけさせろよと悪態を吐き、

「『開け！ウサギ穴』」

地面に向かってこう命じたところ、白兔の足下に小さな穴が開いた。

と、同時に、

「え、ええ!？」

絶対に落ちることのないサイズのその穴に、何の前触れもなく落下した白兔は、当然の如く悲鳴を上げながら、真つ暗な地下へ地下へと落ちてゆく。

その様子を、穴の入り口から覗いていたアリスは、

「あいつが本物のシロウサギだと助かるんだけどなー」

こればかりは城に着くまで解らないしと、溜息交じりに立ち上がる。

「ま、先ずは一仕事完了つと。帽子屋のところにでも行って、お茶しよーつと」

アリスは日傘を広げると、中棒を肩に掛けるようにしてさし、鼻歌交じりに歩き出す。

そうして、二、三步ほど行ったところで、アリスの姿は霧のように消えた。

## 第二話

その世界に色は無く、あるのは黒い文字だけ。

そこに生きる人々に、姿形はない。個性もない。思考もない。

そこに生きる人々は、創造主の手により己に与えられた役割を、ただただ果たすだけ。

永遠にそれだけが繰り返される。

——はずだった。

だが——、

ある日、世界に色が付き、景色が生まれ、存在していた文字には不思議なチカラが付与された。

そこに生きる人々は、元から与えられていた役割に似合おうが似合わなからうが関係の無いとばかりに個別の姿形を与えられ、知恵を与えられ、思考を与えら



れ、それだけでは飽き足らなかつたのか個性と云う代物を与えられてしまった。そうと気づいてしまったら、もう今まで通りには暮らせない。

そして、更に気付いたのだ。

自分達の住まう世界は、何者かの手により常に侵略され続け、無理矢理に改変させられ続けているのだ、と云うことに。

その所為でだんだんとセカイそのものが狂い始め、本来行き来出来るはずのない他のセカイへ行き来が出来るようになってしまい、そこに住まう者達と交流が出来るようになってしまったことに。

これは、由々しき事態。

このままセカイが狂い続け壊され続ければ、やがてこのセカイは……と、人々は眠れぬ夜を過ごしていた。

セカイが狂い続けるのを止める為には。

セカイの崩壊を止める為には。

どうすれば良いのかと改善策を求めて悩み続けていたのは、各セカイを支配する役割を与えられた面々。

そんな支配階級に居る者の一人が、あることに気が付いた。

我々には、『文字』の『言葉』のチカラがあるではないか、と。

そのチカラの名は【コトダマ】。

【コトダマ】は『文字』や『言葉』を具現化することによって、時には物に、時には目に見えぬ強制力等々に変えてしまうチカラ。

『文字』や『言葉』を用いる【コトダマ】のチカラは、使用者の知識に基づいて発揮される為、たとえば本来の言葉の意味とは全く違う間違った意味で用いてしまっても、問題なく意図通りに使用出来てしまうのだ。

そして、このチカラは、このセカイに住まう者であれば、誰でも簡単に、それこそ呼吸をするように使える特別でもなんでもない能力。

この能力を使つて、我々のセカイを侵略する者達が住まうセカイに打つて出て、逆に浸食してやれば、セカイを狂わす原因と、セカイの崩壊を止められるのではと云う、とある國の王案に賛成した人々は――。

× × ×

何処までも澄み渡る青い空。

何処までも続いているのか解らない緑の草原。

薔薇の樹で創られたアーチと生け垣の向こうに見えるは、中世と云われる時代に創られたと思わしき洋風の城。

その手前にある薔薇の庭園は、良く手入れが行き届いている素晴らしい場である。が、どう云うわけか無造作に玉座と、処狭し様々な種類のお菓子が置かれたテーブルが幾つも並んでおり、その隙間を縫うようにして、S Fと呼ばれる世界観を持つ物語に出てくるような謎の機械や管が這いくねり、宙にはS Fセカイで

あればとても相應しいと云える画面が幾つも浮かび上がっている。

こうした機械類の管理やら何やらを担っていると思われる動きをしているのは、どう見てもゲーム用のカードであるトランプなのだ。普通のトランプではないと一目見て解るのは、その縁に棒線のような手足が生えているからだろう。いや、それだけではなく、自我を持っているかのように自在に動き回っているからか。忙しなく動き回り、一生懸命に働いている無数のトランプ達を一切労うことなく、

「ほーんと、魔女と云う存在は素晴らしいな」

と、云ったのは、玉座の上に胡座を搔いて座っている男だ。王冠を乗せた散切り頭の下にある容姿はそこそこ整っており、紋付き袴を身に着け、片手に竹と紙で出来た扇子を持っている。

「このセカイが元に戻ったら、ウチにも一人くらい『魔女』の称号を持つ者が来てくれないもんな」

『魔女』とは、人に害悪を与える為の魔力を備えた女性のことである。そのチカラを用いて、魔薬や呪法を造りだし、病や死をもたらす恐ろしい存在。

だが、寓話や御伽噺のと云った物語の中では、『善』と『悪』に分かれ、物語が始まる切っ掛けや、終焉に導く者でもある。

「なあ、メアリ・アン。どう思う？」

と、男が意見を求めたのは、テーブルの上にお菓子を並べているメイド服姿の少女——メアリ・アンだ。美事な金髪を持つ、雀斑だらけの愛らしい顔をしているメアリ・アンは、意見を求める男の声に顔を上げ、

「確かに、魔女様達の技術は素晴らしいと思います。だけど、魔女様達の技術ちしきを一つ得る為には、此方からも対価として一つナニカを差し出さなきゃならないじゃないですかあゝ」

と、間延びした独特の口調で答える。

「女王様が何も差し出したくないって仰るから、代わりにメアリが、もう四つもお菓子の作り方教えちゃってるんですよ？」

これ以上、魔女に対しナニカを望むのであれば、いい加減そろそろ自分でナニカを差し出して欲しいと、メアリ・アンは頬を膨らませた。

「それに、今はメアリのお菓子で済んでますけどお、もしもアリス様が欲しいな

んて云われたら、女王様、どーするんですかあゝ」

どう見ても男であるにも関わらず、「女王」と呼ばれる男は、メアリ・アンの言葉に、ハツとした様子を見せた。

「それは困るな。アリスはこのセカイに必要な不可欠な存在だ。アリスが居なくなったら、ニンゲン共からの侵略云々関係なしに、このセカイは滅んでしまう」

それに、と、男は素早く左右を見回し、

「滅ぶ滅ばないは別として、アリスが魔女の手に渡ったら」

と、此処まで云って、言葉を飲み込んだのには理由がある。

首元に、細長い鉤爪のような物が、真っ正面から押し当てられたからだ。

少しでも動けば、その鉤爪は自分の首の皮膚を、容赦なく裂き破るだろう。

「アリスが、何ですって？」

と、抑揚がないクセに、明らかに殺意が籠もっていると解る声が出た。

声の主の姿は見えない。

だが、

「王。貴方が他人の首を刎ねることしか能が無い頭を使って、魔女から技術を得

たことは褒められることです。が、その対価にナニカを差し出せと請求されたのであれば、その首を刎ねて差し上げれば良いじゃないですか。『女王』の称号を与えられている者の特権として、何時ものように」

ぐ、と鉤爪が王と呼んだ者の首に刺さると、そこから赤が溢れた。

「ぐ……」

王と呼ばれた者の口から、苦悶の声漏れる。

「はわっ!？」

大変と、メアリ・アン。

彼女が『女王』と呼ぶ者の異変に気付くと、

「チャシャさん！ 落ち着いてくださいですう〜！」

と、抑揚無く喋る鉤爪の主は声を掛ける。

「女王様から離れてくれないと、メアリ、泣いちゃいますよう？」

メアリ・アンは何処から取り出したのか、片手に目薬を持っていた。

抑揚無く喋る鉤爪の主は、メアリ・アンの言葉に反応したのか、それとも、彼女が手にする目薬を見たのか、

「それは、困りますね」

どうやら、メアリ・アンが泣くと何かが起ころらしい。

抑揚のなく喋る鉤爪の主は「女王」から離れたのだろう。鉤爪が消えると、メアリ・アンと共に「女王」は安堵の溜息を吐き出し、先程まで鉤爪が押しつけられていた自分の首を何度か撫で、

「アリスの称号を持つ者を惑わせる称号を持つ者は、何時その立場を逆転させたのやら、今ではすっかりアリスに惑わされてしまっている」と、こう云ってから短く息を吐き出し、

「そうでなくとも「女王」の称号を持つ者にこんなコトが出来るのは、余にその首を刎ねられることがないお前だけだよ、チャシャ」

「失礼致しました」

こう云いながら何処からともなく姿を現したのは、チャシャである。

非礼を詫びる為だろう、彼は恭しく頭を下げているが、目深く被っているフードは外されていない。

「アリスのこととなると、つい」



「つい、ね」

アリスとチャシャが、特別な関係にあることは周知の事実。

アリスがチャシャに、チャシャがアリスに、互いに依存しているようにも見える関係は、その実、アリスに依存しているチャシャに、アリスが合わせてやっているように見えることが多々ある。

そのことに、当人達は気付いているのか、いないのか。

「まあ、いい」

チャシャがアリスのこととなると目の色を変えるのは、今に始まったことではないし。彼が居るとは知らず、たとえ話であれ、アリスの身を危険にさらすような発言をしたのが悪いのだ——と、思ったところで、『魔女にアリスを請求される』云々と云いだしたのは、メアリ・アンだったのだから、チャシャに責められるべきは自分ではなく、メアリ・アンだったのではないか、と『女王』は、メアリ・アンを見やる。

その視線に気付いたメアリ・アンは、下がれと云われたのだと勘違いし、  
「メアリ、お菓子を作り、お城に戻りますねえ」

失礼しますうと、スカートの両端を摘まみ、ぺこりと頭を下げると、城とは真逆の方向へと歩き出した。

「メアリ・アンめ」

その首を刎ねてやろうかと「女王」。

その背に呟くだけで、誰にもそうしろと命じなかったのは、過去に数回、実際に彼女の首を刎ねたことがあるからだ。

しかし、首を刎ねよと命じられる度にメアリ・アンは自分そっくりの身代わり菓子を創り上げ、その菓子の首を刎ねさせることで事なきを得ている。

しかも、身代わりの菓子の首が刎ねられると、

『ああ……、可哀想なメアリ。女王様の御機嫌を損ねてしまったばかりに、首を刎ねられてしまいましたあゝ』

と、これみよがしに、その首を丁寧に弔うのだ。

こうしたことを幾度となく繰り返している、そのうち首を刎ねよと命じるだけ無駄だと、そうイヤでも気づかされるハメになり、

「あー」

と、溜息のような単語を吐き出したものの、己の中に溜まり始めたものを発散する為の言葉は発さず、頭をがりがりと掻いてから、

「あれだ、チャシヤ。お前がたった一人でこの城に来るなんて珍しい、何かあったのか？」

と、若干棘のある口調で訊ねた。

アリスはどうしたと訊かなかったのは、その問い掛けが新たな地雷原になりかねないからである。

「ああ、本来の目的を忘れるところでした。シロウサギらしき者が見つかりましたので、御報告に参りました」

「シロウサギが？」

ほう、と「女王」は目を細めた。

チャシヤの機嫌がすこぶる悪い理由はこれか、と。

「それで、アリスは？ そのシロウサギと一緒に居るのかい？」

「おそらく一緒に居るのではないかと。ただ、アリスと一緒に居ようが居まいが、此処に来るまでには時間が掛かると思えますので」

この城に辿り着く為には、何らかの罪を背負わねばならぬ。

また、その過程で、その順路を違えることなく、入城の為の手続きを済まさねばならぬ。

「ふむ。そのシロウサギが本物かどうかは未だ解らないが、折角見つけてくれたんだ。他のセカイの連中に目をつけられた挙げ句、奪われては面倒なことにもなる。どれ、一時的に我々の國を外界から切り離すとするか」

おいと、「女王」がトランプ達に声を掛ける。

すると、慌ただしくトランプ達が動き出し、幾つかのモニタ画面の中に《臨時メンテナンスのお知らせ》と書かれた文字が浮かび上がった。

画面の中に居る人々はそれに気付くと、文句を口にしながらも次々と消えて行く。

「これで、現世のニンゲン達はほぼ居なくなる」

非現実セカイからログアウトし現実に戻れとのお達しを無視し続け、このセカイに居座るよう残っている者は、後で如何様にも出来る。

「で、チャシャよ」

「はい？」

「そのシロウサギとやらを一応は守らにやららんからな。もしも外界国の称号持ちがウチの領土に無理矢理足を踏み入れて来たら遠慮することはない、その首を縊り落としてしまえ」

「おや、領土と外交問題には全く興味が無いと思っていましたか、ソレを口実に他國に戦でも仕掛け、領土拡大を試みる気が起きましたか？」

「ここら、壮大に人間きが悪いことを云うな。他外國の称号持ちは、ニンゲンが我々のセカイを荒らすことがなければ、その存在を知ること、顔を合わせることも無かった連中だ。そんな連中が我が物顔で、我が領地を歩いているとなれば、余は“女王”の称号を持つ者として、このセカイを守る為にサマザマなもの達の首を刎ねねばならん。しかし、余はこの城の敷地外には行けぬから、セカイを自由に闊歩出来、何処にでも居て何処にも居らぬ、何処にも居らぬのに何処にでも居る者であるお前に、“女王”の称号を持つ者として命じているのだ。このセカイを守れ、と。その際に邪魔になるであろう禁忌は取っ払っておいてやるから、それなりの働きをしろ、と」

「成る程。モノは云いよう、と云うわけですね。承知致しました」

と云った後、チャシヤは僅かに虚空を見上げ、

「アリスが私を呼んでいますので、この辺でお暇を頂きます」

わざとらしく、恭しくお辞儀をして見せた。

×

×

×

現実の中では、自然と触れ合えることが最大のウリとなっている大きな森林公園。園内には、アスレチックや、キャンプ場だけでなく、陸上競技場や体育館、屋外プールと云った運動施設もある場所。オマケに心霊スポットも。

非現実の中では、ゲームを始めた初心者このセカイが非現実を生き抜く為に必要となる知識や技術を教える為の寺子屋や、身に着けた技術や知識を試す為の場やら、宿泊施設やらがあったりするので、初心者から中級者向けの憩いの場として使われている場であり、街へと続く道がある森の中——を、アリスは日傘を差したまま歩いていた。

この森一帯に住まうバグの大きさは小さなコドモの足程度の大きさしかなく、場所柄もあってか、初心者から中級者向けと云われる戦力の弱いバグしかない為、攻撃を受けたとしても致命傷を負うようなことは滅多にない。また、バグが此方の存在に気付いたところで、此方からバグに攻撃を仕掛けない限り、バグが自ら襲いかかってくることもない。

そんなバグの姿は、齧歯目の小動物をモチーフにデフォルメされたモノや、ありとあらゆる様々な鳥類をモチーフに、やはりデフォルメされたモノ。それと、現実のオマケに基づいてか、ゴーストと云われ存在をモチーフにしたのであろうバグが多い。

デフォルメされたバグの見た目は可愛らしく人気があり、平時であれば街中同様に、多くの者達で賑わっているのだが、今は人っ子一人居ない。

「ヒトが居ないと、静かなも……」

んだ、と、云おうとしたアリスが途中で言葉を引っ込め、ついでに足を止めたのは、聞き慣れぬ音が森中に響いたからである。

それも、一回や二回ではない。

連続して五回。

鳴り止んだかと思えば、少しの間を空けて、また連続して聞こえてくる。

「なんだあ？」

この音は、と、アリス。

誰かがバグと戦っている音だと云われたら、そうかもしれない。

でも、誰が？

「……えー、もしかして、あそこにアイツが居ちやったりする？」

アリスが口にした『アイツ』とは、白兔と名乗った彼のことである。

だとしたら困るなあ、と。

一応、確かめておいた方が良いかなとは思うものの、バグと云う存在は、現世からやって来る者達からしてみれば架空の存在でしかないが、このセカイで生きている者からしてみれば現実存在するモノ。そうした存在と対峙するには、それなりの覚悟と準備がいる。

「んー……、でもなあ、城に行く途中で俺がアイツと一緒に居て良い場所は、帽子屋のとこくらいだからなあ」



どうしたもんかな、と、一人悩み出したアリスが、

「んあ？」

と、間の抜けた声を出したのは、森中に響く音に反応したバグが自分達の近くに居たアリスを敵と見做し、その出方を窺うかのように、じりじりと近づいて来ていることに気が付いたからである。

「わ、これ、ヤバいかも……」

前方から迫り来る虫型のバグ。

右方向から迫り来る鳥型のバグ。

左方向から迫り来る獣型のバグ。

では、後方は？ と、チラリと振り返る。

後方から迫り来る甲殻類型のバグ。

「わぁお、俺ってばモテモテ？」

嬉しくないけど、アリスはぼやく。

だが、ぼやくだけで、日傘を畳もうとしなければ、戦闘態勢に移行する素振りも見せず、ただおろおろとしている。

「お前らに、俺が誰だか解ってんのかって云ったところで無駄だしなあ」

アリスは、困った、と、繰り返すことしかししない。

しかし、バグ達が自分と一定の距離を保っていることにふと気付き、これはどう云うことかと周囲を見回したところ、森の奥から、木々を倒すことなくゆっくりと風のように近づいて来る巨大な影を目にしたものだから、目をぱちくりとさせ、

「ありゃあ、ヴァンダー・スナツ、」

と、言い掛けたところ、

「伏せとけ、アリス！」

と、謎の声がした。

「へ?!」

何が何やら解らぬまま、アリスの身体は謎の声が発した言葉の通りに勝手に動き、地に伏せる。

「ちよ、なっ!？」

何なんだとアリスが云ったのは、地に伏せた自分を守るようにしてバグ達が寄

り集まり、小さなドーム状の壁と化したからだ。

それから直ぐに、熱の混じった咆哮が空を振るわせ、何やら耳障りな笑い声と、どう云うわけか大地を引き裂いていると解る、あまりにも物騒な物音がしはじめた。

それだけではない。

なんと例えるべきか。

こう、甲殻類や食肉が焼ける良い匂いの中に、何とも云いようがない不思議な臭いが混じり、アリスを守る壁が徐々に薄くなつてゆくのが、手に取るように解るのである。

やがて、

「わ!?!」

と、アリスが声を上げ、天井部を見上げて目を見張ったのは、そこがナニモノかにごっそりと削ぎ落とされ、樹々の葉が覆い茂る薄暗い空が見えたからである。

続いて、瞬き一つする間にバグが霧散し、目に見えない何かが降ってきたかと思えば、それは炎と化して地を燃やす。

だが、その炎がアリスに迫ることはなく、森を燃やすこともない。

「何だったんだ」

こんなところに上級者向けのバグが出るなんてと、アリスが頭を掻きながら立ち上がったところ、

「アリス！ アリス、アリス、アリス、アリス、アリス、アリス、アリス!!」

キンキンと響く耳障りな声のアリスを何度も呼び、耳を塞ぎたくないような笑い声が目の前に降って来た。

「ひひやはっ！」

それは、今にも壊れそうな麦わら帽子を被った、泥だらけのやんちゃ坊主を思わせる顔。何故かボロボロの蝶ネクタイにチョッキ姿の成年男児で、

「ハムサンド食べる？」

と、彼は手にしている何かの取っ手をアリスに差し出した。

これの何処がハムサンドなのか、と、アリスは問うことなく、

「いや」

食べないと首を横に振る。

すると、

「じゃあ、タルト」

今度は七色に光る何かの鱗を取り出して、それをアリスに差し出した。

「要らない」

アリスは、きっぱりとそれも断る。

「そー？ 残念残念」

要らない物は無理強い出来ない、成年男児は取っ手と鱗を、明明後日の方向に放り投げ、

「で、きみは、アリス？」

と、訊ねながら首を傾げて見せた。

「正真正銘、俺はアリスだよ。つーか、アリス以外が、＼アリス＼を名乗るのは御法度で、どんな罪よりも重い罪になるんだ。そうと解ってて、＼アリス＼の称号を名乗るヤツあ、いねえだろ」

むしろ、「アリス」と一目で解る服装をしているのだから、他の何に見えるのかと、アリスは返す。

「それもそうか」

「そうだよねー、と。」

あつははははははははと笑う声は、ひとしきり笑うとぴたりと止まり、

「あのね、ボクは三月さんがつ」

自分を知らない者に対し、自己紹介をするかのよう、こう云った。

「知ってるよ。お前は三月兔、だろ？」

アリスに『三月兔』と呼ばれたこの成年男児。性格と口調は、一言で云えば、程良く支離滅裂であるが為に、自ら進んで関わりとうとする者は少ない。

そのことを当人が理解しているのかどうかは解らないが、躊躇う素振り等を見せず、ぼんぼんと返ってくるアリスの言葉に、

「うん。うんうんうん、そう」

「そうだよと、三月は満足そうに頷いて見せた。

「で、さっきのは何だったんだ？」

「さつき？ なになんて？」

「俺に伏せろって云ったの、つか、伏せさせたの、お前だろ？ 後、なんでこんなところにヴァンダースナッチなんか居たんだよ？」

「あー、そのことかー。えっとねー、アリスを伏せさせたのは、ボクじゃなくてヘイヤだよ」

ヘイヤと云うのは、簡単に云ってしまえば、もう一人の三月である。ただ、別人格とかそう云ったモノではないらしく、詳しいことは本人でさえも解っていない。

「それで、この奥でヘイヤと遊んでたら、燻り狂ったのがいきなり出てきてさ。放っておいたら危ないって思って、折角だから退治してやろうってヘイヤと頑張ってたら、彼がアリスを見つけてね」

一切の戦闘能力を持たぬアリスを巻き込んだら危ないと、声を掛けたのだと云う……が、話がどうにも要領を得ないのは何時ものこと。

だから、

「そうか」

成る程、解った、と、そんな言葉を口にしながら、アリスは頷いて見せた。

取り敢えず、これ以上の詳しい説明を求めたら、三月は虚実の『虚』がふんだんにあしらわれた誇大妄想を雄弁に語り出すと解っているので、解らない部分を、己の持つ知識と、この場で起こり得たであろうことを適当につなぎ合わせて保管してから、助けられたことに対し素直に礼を述べると、三月は満足そうに笑い、

「で、きみはアリスなの？」

「さっきもそう云つたろうが」

まあ、普段は持ち歩いていない日傘なんて物を持っているから三月は疑ってきているのだらうと、アリスは手元に目をやった。

その日傘が、ない。

おそらく、伏せろと云われた時に、無意識に日傘を手放してしまったのだらう。

ただ、それから、その日傘がどうなったかは解らない。と、云うことは、普段は持ち歩いていない日傘を持ち歩いていることが原因で、三月が自分を「アリス」であること認識していないわけではないらしい。

他に変わったことと云えば、地に伏せた所為で多少埃まみれになっているだろ



うことくらいしか思いつかず。

ただ、それくらいのことので、幾ら三月でもしつこく『アリスか?』とは訊いてこないだろうと思っていると、

「きょーは怖いお兄さんが、一緒じゃないだけかー」  
と、三月。

「あー」

成る程と、アリスが両手をぼんと合わせたのは、三月の云う『怖いお兄さん』が、チャシャであるとは解ったからだ。

つまり三月は、アリスがチャシャと一緒に居ないから、アリスをアリスだと認識出来ない、と、云うことらしい。

そう云われてしまうくらいに、アリスとチャシャは常に共に居ると、自他共に認めてはいる。

だから、と云うわけではないが、

「呼ぼうか?」

と、アリス。

アリスが呼べば、何処に居たつてチャシャは何処からともなく姿を現す。

「ううん」

大丈夫と、三月は首を横に振る。

「確かめるほーほーは他にもあるの」

アリスがどんな風にと訊く前に、

「こんな風に」

と、アリスのスカートの裾をむんずと掴み、

「ていつ」

と、勢いよく捲ったではないか。

「は？」

捲られたアリスのスカートは、くびれのないぺったんこで無毛な下腹部と、肉付きの良い太股を隠すことを一瞬だけ止め、恥ずかしげもなく外部に晒す。

白日の下に晒されたそこを見た三月が、

「履いてない」

と、一言。

履いていない。

確かに、アリスはスカートの下に何も履いていなかった。

否、ほっそりとした御御足を覆うオーバーニーソックスと、太股に巻かれたソックスベルトだけは見えたが。

「履いてないから、アリスだ」

履いてないと繰り返し返す三月に、

「待て！ 履いてないと俺って、どんな認識の仕方だよ!？」

前にもこんな認識の仕方をされたことがあったようなと思いつつ、アリスは顔を真っ赤にしてスカートの裾が広がらぬようにと、そこを強く握りしめる。

「え、だって、アリスは履いてないし」

「五月蠅え！ 履いてない履いてない云うな！」

履いてなくて何が悪いと開き直ったアリスに、三月はべったりと正面から抱きつき、

「履いてないとし、えっちなことしやすくして、良い？」

アリスの尻を遠慮無く鷲掴みにする。

「三月！」

いい加減にしろと、アリス。

「ふひひ、蟲姦とかどーかなー」

綺麗で可愛いアリスの肌に、醜い虫を這わせたい。

穴と云う穴を。大量の芋虫に出入りさせて、腹が破裂する程に卵を埋め込んでもらって、それを産卵する様が見たい、とか。

「ヒトの話を聞け！」

「スライム姦とかも良いと思うんだ」

何でも飲み込み溶かすバグの体内に、アリスを放り込み、もがきながらも、体中の到るところを絶妙に擦られて、それがやがて快樂と化し、恥じらいながらも猥らに反応してしまふ様が見たい。

「だーかーらー！」

「或いはねー、汚いオッサンとの乱交とかー」

可愛いアリスが、醜く汚いと称される中年男性の慰み者にされる。

嫌だと泣いて喚いて誰かに助けを求めても、オッサン達が長年培って来てテク

と、見たこともない玩具に翻弄されて、最後には自分から腰を振るまでになり、最後には肉便器へと墮ちゆく様を見るのも良い、と。

「監禁調教物も捨てがたいと思うんだ」

鉄格子の嵌められた地下室等に、一糸纏わぬ姿で監禁され、逃げ出せぬようにと手足に枷を嵌められ、口には轡を。

そうして、日夜、様々な薬や道具を用いて、快樂調教が施され、徐々に自我を手放してゆく。

そうして、最終的にはと、三月が言い掛けたところで、

「お前は何処で、そーゆー変な知識を身につけてくるんだ!？」

マジでいい加減にしろと、アリスは怒鳴った。

三月の垂れ流す妄想話に合わせて、尻を執拗に、しかもある部分に集中させるようにして揉みしだかれ、わざとなのか意図的なのか、ふとした拍子に菊座の辺りを弄られたりしている所為で、だんだんと変な気分になってきてしまっている。

このままでは、と。

これを悟られる前に、と、

「三月、シロウサギが見つかったぞ！」

アリスがこう云うなり、三月はパツとアリスから離れ、

「ホント？ それホント？ ホントに見つかったの?! ウサギ！ シロい!! シロウサギが!」

何処に居るのかと、矢継ぎ早に質問をする。

「まだ、本物かどうかは解らないけどな、城に行くようには云ってある」

「なんですとー!? わ、こうしちやいられない! 同じウサギとして、ウサギの座は渡さないんだからー! ウサギ枠はボク一人でじゅーぶん!!」

きるゅー! 等と、喚きながら、三月は来た方向とは別の方向へと走り出す。

「あー、無駄に疲れた」

と、アリスはその場にぺたりと座り込む。

そして、自分の身を守る為とは云え、シロウサギを犠牲にするような真似をしたことに対し、罪悪感を抱いてやろうと思ったのだが、それだけで終わってしまった。

「……と、云うか。うん」

アリスは視線を己の股間に向ける。

特に気になるところはないが、

「おーい、チャシヤー」

居るか？ と、アリスが声を掛ければ、

「何時でも、お傍に」

こうした返事、何処からともなく闇色のローブを纏うチャシヤが姿を現す。

アリスはチャシヤの姿に、ホツとしたような短い息を吐き出すと、

「唐突だけどさー」

「はい」

「俺を抱け」

と、上目遣いに一言。

『抱け』とは一体どう云った意味なのか？ なんて問うこともなければ、何故に

アリスがそんなことを云うに到ったのかと問うこともないチャシヤだが、

「此処で、ですか？」

場所については疑問に思ったらしく、こう訊ねた。

「うん、此処で」

アリスは、どうせ誰にも見られない場所だし、何の問題もないだろうと返し、「まあ、嫌なら別に良いけど」

と、付け足したのは、チャシヤが行為の誘いを断るわけがないとタカを括っているからである。

が、チャシヤの様子は、何時もと違うもので。

そう、何時もであれば此方から誘わずとも、隙と暇あらばところ構わず己の欲に忠実に襲ってくるのに、全く動こうとしないチャシヤを見、

「にや？もしかして、シたくねえ？」

と、アリス。

まあ、チャシヤにその気がないのであれば、致し方ない。

所謂、ムラムラとしている身体は、何もしなければそのうち落ち着くだろうし、なんて思い始めたところで、

「いえ」

チャシヤは、そう云うわけではないのだと口にしてから、



「私以外の者に欲情させられ、その処理をさせられるのですから、もう少しイヤらしくおねだりをして欲しい、と。そう思いました」  
こうした言葉を口にしたものだから、

「はあ!？」

アリスは素っ頓狂な声を出してしまう。

だが、お前はなんてことを云い出すんだ！ とは云わず、

「も、もしかしなくても見てたのか!？」

三月にされていたことを、と、問うが、チャシヤは何も答えない。

ただ、

「さ、アリス」

チャシヤは、にこりともせず、無表情なまま、抑揚も感情も全く見えない、聞こえない声で、アリスを促す。

「にゃ……ッ、にゃーっ!!」

これは絶対に、見ていた、と。

何時から見ていたのかは解らないが、確実に自分が呼ぶ前からあの場において、

三月にされていたことを見ていたのだと確信する。

そうでなければ、チャシヤがこんなことを云うはずがない、と。

「確かにお前とシたくなつたのは、三月にされたことの所為だけどー。でも、お前以外とはシたくないから、こうやって俺なりに精一杯のお誘いしてんのに」

それが不満で、お前がシたくないなら良いやと云いながら、アリスがちよつとスネて見せつつ、頬を膨らませれば――。

## 第三話

現実であれば、商店街へと続く街の大通り。

非現実では、旅人が行き交う大きめの街道。

現実であろうが、非現実であろうが、特に何か変わったところはない場所。

ただ、今はNPC以外、人っ子一人居ないが為に、若干不気味さを感じる。

そんな場所の道の端に置かれているベンチに腰掛け、ぼーっとしているのは白兔だ。

どうしてこんな場所にあるベンチに座り込み、ぼーっとしているのかと問われれば、アリスに城に行くように云われた際、突如足下に空いた穴に落ち、落ちこち続けて、落ちて落ちこちて、落ちて、漸く浮遊感が無くなったと、穴から抜け出せたのだからと、一息吐いたところ、こうしてベンチに座っていたからである。だからと云って、ずっと座っていたわけではない。

一度は立ち上がり、城へ向かおうと思いはしたものの、現実へと戻る気力が湧

かず、ついでに云えば、その城とやらへ行く道が解らなかつたが故に、地図で調べてみようかと、再びベンチに腰掛けてしまったところ、動く気力が完全に失われてしまったのである。

動く気がなくなつたのなら、無理して動くことはあるまいと、ぼーっとして非現実の風景を眺めているわけだが、時折、現実の風景が見え隠れする。

まあ、現実のセカイとリンクするように創られた非現実、仮想現実のセカイだ。現実よりも、仮想現実の方で長く過ごしているところ、そこから抜け出した際、どちらが、どちらなのか判別が着かなくなることがあると云う。

だから、その逆も、また然りなのだろう。

ただ、現実から逃げる為に非現実セカイへとやって来たと云うのに、イヤでも、現実が非現実の中で、非現実が現実の中で、ちらちらとちらつくのは、何とも云えない気分になる。

それはさておいて、

「これから」

どうしようかと、白兔は一人呟く。

いや、どうするもこうするも、アリスに云われた通り、城に行かねばならないことは解っている。

解ってはいるが、行きたくない。

行きたくないのは、非現実から現実へと戻りたくないからだ。

そう。

ポータル広場の噴水前で、ぼんやりとしていた際。突如、PKが現れ、謎のウイリスを撒き散らした所為で、ログアウトが出来なくなった、あの時。

正直云って、嬉しかったのだ。

現実に戻ることが出来なくなつて。

現実に戻りたくない理由。

それは、色々とあるけれど、現実が辛いからとか、そう云った理由ではなくて。現実に戻ると、嫌でも目にしなければならぬ物があるからだ。

それから目を背ける為、わざわざ現実から非現実へとやって来たのに。

それなのに。

非現実の外側にある現実が、見えないはずのそこが、ちらりちらりと見え隠れするものだから、白兎は堅く目を閉じた。

白兎がそうまでして目を背けたい現実とは何なのか、それを知る者は、おそらく白兎本人だけだとは思うが。

そうして、どれだけ目を瞑り続けていたのか。

白兎が目を開けたのは、

「柳生、死すべしいいいいいいいい!!」

と、云う、謎のわめき声が聞こえてきたからだ。

それを云うなら、柳生ではなく、野獣ではないかと云うツツこみはさておいて、一体全体何なのかと、声のした方に目を向けてみた。

すると、麦わら帽子に、ボロボロの蝶ネクタイとカーディガンを身に着けた男

児——三月が、木の枝片手に猛烈な勢いで走って来るのが見えた。かと思えば、そのまま通り過ぎて行った。

今のは一体何だったのかとは思うものの、君子危うきになんとやら。

非現実には現実から、完全に解放されたと思ひ込み、タガを外して奇行に走る者は割とする。

さっきのあれは、おそらくそのテの者だろう、と、納得しかけてふと気付く。

今は、非現実には現実の者は、居ない、はず、では？と。

だって、さっき、《緊急メンテナンスのお知らせ》と云う文言が空に踊り、それを見た者達が次々とログアウトして行くのを見ていたのだ。

だから、この非現実の空間に居る者は皆、NPCと呼ばれる、運営が創りだした架空の人形だけの、はず。

否、アリスのように見回りをしていると云う運営の者がいたとしても、あのように狂った者は居ないはずだ。多分。

だったらあれは、と、白兔は三月が走り去った方を改めてみやるのだが、三月の姿は既に影も形もなくなっている。

これは、何も見なかった、とか。

現実には、何もない故に見えた夢幻の類いにして、気のせいで済ませておいた方が良くないかも知れない。

溜息を一つ吐き出したところで、

「……あら？」

と、云う、鈴の音のような声が聞こえてきた。

この声の主が気になったのだろう白兔が顔を上げたところ、二人の少女の姿が目に見え込んで来た。

片方は、純白のドレスに身を包み、純白の日傘を差している、亜麻色の髪の上品で可愛らしい少女。

もう片方は、真紅のドレスに身を包み、真紅の日傘を差している、亜麻色の髪の上品で可愛らしい少女。

二人の少女は双子なのだろう、鏡に映したようにそっくりで。見分けの付け方は、着ているドレスの色と、差している傘の色の違いだけか。

白と赤、二人の少女は、白兔の顔をじっと見た後、気品溢れる笑顔を見せ、



「『どうかなさったの?』」

と、首を傾げた。

この白と赤の双子姉妹は何者だろうか。  
こんなNPC居ただろうかと思いつつ、

「あ、あの、実は」

その……と、白兔。

信じて貰えるかどうかは解らないし、此方の言葉を適切に理解し、返答がある  
とは限らないと思いつつも、先程目の当たりにした三月の話をしてみたところ、

「まあ、それは三月じゃないかしら」

「そうよ、きつと三月だと思っわ」

と、白と赤の双子姉妹は顔を見合わせると、こくりと頷く。

「サンガツ?」

とは、あの謎の単語を喚きながら走り去って行った者の名だろうか、白兔は  
小さく首を傾げると、

「アナタ、三月を知らないの?」

と、白い双子の片割れが云い、

「そう云えば、見掛けない顔ね」

と、赤い双子の片割れが、まじまじと白兔の顔を見やる。

このあまりにも自然なやりとりと、しなやかな動きに、この白赤双子少女はプログラムにより創り出されたものではなく、本物の『ニンゲン』なのではないかと思わずにはいられない。

いや、もしかしたら、アリスと同じく運営側の者で街を見回っているのかも知れないが、そう考えると色々とおかしい部分が出て来るな、と。

「アナタ」

と、白い双子の片割れが、白兔に声を掛け、

「お名前は？」

と、赤い双子の片割れが、白兔の名を訊ねる。

「あ、白兔、です」

しろいうさぎって書いて白兔、と、アリスに名乗った時と同じように、白兔は名乗った。

すると、

「はくと？ そんな称号を持った方、このセカイに居たかしら？」

「もしかして、余所のセカイから遊びに来られている方かしら？」

「そうだとしたら、三月を知らないことにも納得が出来ますわ、お姉様」

「ええ、そうね。それなら、三月を知らなくても仕方が無いわね」

白と赤の双子姉妹は口々に云って、何か納得した様子を見せる。

目の前で繰り広げられている会話に、一人首を傾げている白兔に、

「貴方」

と、声を掛けたのは、双子の片割れの赤い方だった。

「次、三月を見掛けても、見て見ぬフリをしなさいな。あの子の言動をいちいち気にしていたら、キリがないわ」

「もし、三月に話しかけられても言葉を交わしてはいけないわ。あの子と関わりとロクなことが無いの」

「もし、あの子に話しかけられて返事をしてしまい、偶然にも会話が噛み合って、そのまま会話を続けることが出来たとしても、気付いた時には壊されているかも

しれないわ」

「あの子はオカシイの」

「あの子は狂っているの」

「だから、あの子と会話が出来るのは、アリスだけよ」

「だから良いこと？ またあの子を見掛けても、喋り掛けられても、絶対に無視なさいな」

良いわね？ と、凜とした声音の赤白双子姉妹に詰め寄られれば、

「はい」

解りましたと、頷くしかない。

「ああ、それと、パンチとジュディ兄弟と、ディーとダム兄弟にも注意した方が  
良いわ」

「そうね。あの決闘マニアの双子達に関わると、ロクなことがないもの」

解ったわね、と、再び凜とした声音の赤白双子姉妹に詰め寄られれば、その二  
組の兄弟が何者かとも訊けず、ただ、

「はい」

解りましたと、やはり頷くしかないのだが、

「貴方、素直ね。氣に入ったわ」

赤白の双子姉妹に、白兔はそう捉えられてしまったらしい。同時にこう云ってから、

「ワタクシは、白の女王」

と、双子の片割れである白い方が名乗り、

「わたくしは、赤の女王」

と、双子の片割れである赤い方が名乗る。

「今、白の騎士にお茶を用意させるわ」

「今、赤の騎士にお菓子を用意させましょう」

「私<sup>わたくし</sup>達の無聊の慰みに、貴方のセカイのお話を聞かせて頂けないかしら」

そう云った赤と白の双子女王姉妹は、白兔の返事も聞かずに左右に分かれると、彼の隣にそれぞれ腰掛けた。

×

×

×

一言で例えるなら、そこは高級温泉旅館自慢の浴室。

その浴室に相応しい豪勢な造りの大きな檜風呂に浸かっているのは、アリスである。

この檜風呂がある場所は、街の一等地に建つ豪邸・公爵夫人宅であり、公爵夫人と云うのは喪服姿の未亡人で、非現実セカイを旅する者の為に、無料で宿を提供している——と、云う設定になっている人物のことだ。

檜風呂の縁に両腕を置き、身体を浮かせてばしゃばしゃと足を動かしつつ、気持ち良さそうに鼻歌を歌っているアリスのその様子は、中年男性が買うゴシップ雑誌のエログラビアコーナーを飾れると断言出来てしまうような、色気と艶がある。

ただし、湯船の中に大量のアヒルの玩具がなければ、の話であるが。

「やーぱー、風呂サイコーにやー」

風呂に浸かっていることで肌を桜色に染め、顔を蕩けさせるついでに、語尾すらも蕩けさせている。

「アリス」

と、脱衣所から柔和な声が掛かり、

「タオルと着替え、置いておくわね」

曇りガラスの向こう側に、ほっそりとした女性らしいシルエットが浮かび上がる。

アリスは慌てた様子で、風呂桶の中での居住まいを正し、

「公爵夫人、ありがとう！」

と、礼を云った。

「そろそろ、カエール達と一緒に御夕飯のお買い物に行つて来ようと思うのだけど。アリス、今夜は何が良いかしら？」

「あ、俺ね、また出掛けなきゃなんないんだ。だから、飯は外で済ませてくるよ」

「あら、そうなの？ 帰りは遅くなるのかしら」

「ん、解んない。シロウサギが見つかったかも知れないから、城に行かなきゃなんなくてさ」

「あらあら、それは大変ね。じゃあ、アリス、出掛ける時は気を付けて行くんですよ」

この言葉を最後に、公爵夫人は脱衣所から出て行ったらしく、柔和な声がアリスに語りかけてくることは無くなった。

「シロウサギ、か」

それにしても何処に行ったのだろうか、アリスは檜風呂の縁に頭を乗せ、天上を眺めながら呟く。

白兔と名乗る青年と出会い、城へ行くように云った後。

惨劇の広場を見て回ってから、直ぐにシロウサギ、もとい、白兔を追いかけたつもりだったが、彼には会えず。

代わりに出会ったのは、別の『ウサギ』である三月だった。

その三月にロクでもないメに遇わされた所為で。

「うん、チャシャと久しぶりにやれたのは良い」



うん、うんと、何やら一人満足そうにアリスは頷く。

「あいつ、何でか最近すっげー忙しそうだからなー」

これも、ニンゲンのセカイと、此方のセカイを無理矢理重ね合わせて、簡単な手続き一つで誰でも行き来が出来るようにしてしまった結果だろうかね、と、考える。

そうだとしたら、と。

「どーせ、殿がチャシヤに何か命じてるんだらうけどー」

このセカイにおいて、アリスの云う『殿』の云うことは絶対だ。

『殿』に逆らえば、たとえアリスであっても、たちまち『その首を刎ねてしまえ』と云われ、首と胴体が離ればなれになってしまう。

そうなれば、どうなるかなんて、誰にでも解ること。

それに、神出鬼没で、謎の戦闘能力を有するチャシヤは、諜報活動等々に持つてこいだらうから、王たる者が、己の手足として使いたがるのも解る。

解るが、と

「あいつは、殿のモンじゃなくて、俺のモンなのにー！」

もう!! と、アリスは手足をバタつかせ、湯船に張るお湯を、ばしゃばしゃと波立たせる。

「つーか、チャシヤもチャシヤだ! チャシヤはもう少し、俺を構うべきだ」と、云いながら、アリスはふと昔のことを思い出す。

それは、アリスがアリスになる前のこと。

色彩と呼ばれる物も、景色と呼ばれる物も一切存在しないこのセカイにやって来たばかりで、右も左も解らなかつた時、目の前にチャシヤが現れた時のこと。

あの時、チャシヤが冷たくも温かい手でこの手を取って、アリスと云う称号を与えてくれて、このセカイのイロハを教えてくれた。

そのお陰で、何もなかつたはずの自分は“アリス”となることが出来て、このセカイそのものに迎え入れてもらうことが出来て、それから、と。

「はっ!」

チャシヤが傍に居ないと、時折どうしようもない不安に駆られるのは、その所

為だと前から思っていたが。なんとなく、卵から孵った雛鳥が、初めて見た動くものを、親鳥と勘違いするアレに似ているな、と、そんなことを思ってしまったものだから、

「あいつは、俺にとつてのニワトリ！」

と、自分でも、それはどうなのかと思う言葉を口にしてから、

「ニワトリ……」

ニワトリは朝を呼ぶ鳥ではあるが、それと同時に、悪夢の卵を産む鳥でもある。だから、

「ニワトリは違うな」

自分にとつて、チャシャは悪夢なんかではない。むしろ、悪夢を見たら、それを払い、引き上げ、助けてくれる存在なのだ。

じゃあ、と。

適切なたとえは、と、そう考えているうちに、アリスは一時的にはあるが、  
“シロウサギ”のことを完全に忘れ去ってしまった。

×

×

×

「貴方のお話はとても楽しかったわ。ねえ、お姉様」

「ええ。妹の云う通りよ、貴方のお話はとても刺激的で面白かったわ」

白と赤の双子女王姉妹は、満足そうにこう云って、コロコロと笑う。

「もっとお話を聞いていたけれど、そろそろ行かなくては」

「またお会いすることが出来たら、またお話を聞かせてくださいましね」

白と赤の双子女王姉妹は優雅に立ち上がると、

「もしよろしければ、次は拳を交えてみたいわ」

「もしよろしければ、次は拳を交えましょうね」

と、物騒な言葉を放った後、

「では、さきげんよう」

小さくお辞儀をして、二人仲良く何処へともなく去って行く。

赤白双子女王姉妹に呼び出され、お茶とお菓子の準備をさせられていた赤い甲冑と白い甲冑姿の『騎士』二名は、それらの物を片付けてから、白兔に一礼して

去って行く。

赤と白の双子女王姉妹、それと、白と赤の騎士二名を、一言で言い表すなら、嵐。

そう、嵐が来て、去って行ったようだと、白兔。

ところで自分は、あの赤白双子女王姉妹に、どんな話を聞かせていたのかが、全く思い出せない。

最初は、ただ自分の身の回りの、誰にでも訪れる日常話をしていただけな気がするのだが、そんな何の変哲もないただの話を、あの赤と白の双子女王姉妹は、まるで異国に伝わる聞いたこともない御伽噺を聞くかのように、もっともつとせがんで来るものだから、ついうっかり、話してはならないことまで話してしまったような気もする。

もしも、知られてはいけないことを、話してしまっていたのなら。

それが、たとえ、自分のミスであっても、あの二人を、双子を、姉妹を、女王を、生かしておけない。

生かしておいたら、現実セカイに戻った際に、自分は、と、白兔はゆらりと立

ち上がった——までは良かった。

そう、そこまでは。

「!?」

こう、何とも云えない痛みと衝撃が、全身を襲ったのは、立ち上がって直ぐのことだった。

言葉にすることが全く出来ない衝撃と痛みに、白兔は暫し、その場でのたうち回る。

それが和らいだ頃、漸く自分が地面の上に転がっていることに気が付いた。

これは一体どう云うことだと思いつつ、怪我や骨折等々をしている箇所はないかと確かめながら、立ち上がる。

若干の擦り傷や小さな傷はあったものの、骨折やら何やらと云った箇所はない。

この後どう動くにしても動くことそのものに問題はなさそうだと、白兔はホッと安堵の息を吐き出した。

ただ、改めて、あの赤と白の双子女王姉妹の後を追おうとしたところで、ある違和感に気が付いた。

その違和感と云うのは、遠近感と云うか、周囲にある物の大きさが明らかに違つて見えると云うか、兎に角、何もかもが巨大に見えるると云うことだ。

これは、どう云うことか。

さき程まで座っていたベンチに目をやれば、それは見上げなければならぬ程に巨大化しているし。

普段であれば、何も考えずに踏みつけているだろう程の大きさしかない小石も、巨石にしか見えなくなっている。

更には、この道を行き交う人々が、巨人にしか見えないのだ。それは、メイド服姿の少女然り、喪服姿の夫人然り、何故か殴り合いながら歩いて行く双子然り、それぞれに剣と盾を構え口論しながら去って行く双子然り、然り、然り、然り、然り、然り、然り。

白兎は、だんだんと開いた口が塞がらなくなって来ていた。

このままでは、途方に暮れる以外の選択肢がなくなると、途方に暮れ始めた頃、「おや、アンタ。どうなすったね？」

と、背後から声を掛けられた。

振り向いて見ると、人の良さそうな老紳士がパイプ片手に、立っていた。ただ、見た目と云うか、身に着けている背広の色合いと云うか、帽子の下から覗いている特徴的な前髪と云うか、それらの物がどことなく虫を連想させる出で立ちである。

そんな老紳士の背丈は、白兔より頭一つ分小さいくらいだ。

「見慣れない顔だが、何かお困りかね？」

この老紳士は、困っている者が目の前に居たら手を差し伸べたくなるタイプの者なのだろう。

「あ、あの！」

と、白兔は迷うことなく、自分が今困っていることを、何の迷いもなくそのまま伝えた。

そうして、白兔に突然身体が小さくなった気がして困っていると云われた老紳士は、白兔のその言葉を疑ったりするような素振りは一切見せず、そうした現象は何処にでもあり、誰の身にでも起きるとコトだと云わんばかりに頷いた後、身体が小さくなったと感じる前に何か口にしなかったかと、そうであれば心当たり



があるとしても云うかのように問うた。

そう云われてみればと、白兔。

白赤双子女王姉妹が、白い騎士と赤い騎士それぞれにお茶とお菓子を用意させ、その用意させた菓子と茶を、勧められるままに口にしたことを思い出し、そう答えると、

「そりゃあ、赤の女王と白の女王が用意した菓子が、メアリ・アン製の物だったんじゃないかね」

老紳士曰く、この『メアリ・アン』と云う者は、見目麗しい菓子を作るのが得意なのだそうだが、それだけで、その見た目に欺かれて食べるとトンデモナイ目に遇うと云う、毒菓子造りの名人なのだと云う。

しかも、一切の解毒剤が効かず、本人は無自覚でそう云った菓子を作っているからタチが悪い。

しかしながら、この毒を回避する方法が全くないわけではない。

それは、メアリ・アンが作った菓子には必ずメモ書きがついて、そのメモ書きに従って食べれば、何の問題もなく、見目麗しい菓子を、そのまま美味しく頂く

ことが出来る、のだそうだ。

ただ、

「『女王』の称号を持つ者は、他の称号を持つ者が無意識に発揮する効果を、その権限で全て消すことが出来るからのう」

メアリ・アンが作った見目麗しい菓子を、その見目麗しいまま、美味しく食べることが出来るのだと、老紳士は云う。

つまり、その効果を持つが故に、赤と白の双子女王姉妹はメアリ・アンの菓子が持つ毒性を忘れてしまっていて、悪気がないまま白兔に勧めてしまったのではないかと、老人はそう云うのだ。

「まあ、小さくなってしまうことに悲観することはない。もし良ければ、我々の仲間として迎え入れようと思うが」

どうかね？ と、老紳士。

何だ、この、次から次へと起こるイベントは。

こちらの言葉に、的確に返してくるNPCは。

幾ら現実に帰りたくないとは云え、これではまるで。

まるで、なんだ？

そうだ。

まるで、ニンゲンの手で創られた非現実ではなく、非現実の中の者達の手により創られた現実のようではないか。

それは、現実の中に住まう非現実の者達が、現実に住まう者達を欺す為に、それらしい言葉を並べて創り上げた、非現実の中にある現実で。

そこに並べ立てられている言葉にまんまと欺されていると気付かぬ者だけが、アプリ、乃至、ソフトを使うことで、現実と非現実を、非現実と現実を行き来することが出来、そのカラクリに気付いてしまった者は、どちらかのセカイに捕らわれてしまうのではないか。

——とか、そんな風な考えは、普段であれば、何を莫迦なと一蹴してしまうところだが、もしも、この莫迦な考えが『現実』のものだとしたらと、そう考えるとしつくりと来るようなことがあったのは、事実。

では、誰が一体、何の為に、そんなことを、と。

また、自分は何の為に、このセカイに閉じ込められたのか、と。

それを確かめる為にも、

「あ、いや、その、申し出は嬉しいんですけど」

お断りしますと白兔が云うと、老紳士はここで初めて不満そうな表情を作り、「何か不都合があるかね？ なに、最初は戸惑うことも多いだろうが、森の中に住まう者達が手取り足取り、色々と教えてくれるじゃろうて」

だから、と云うように手を伸ばす。

この手を取ったらどうなるのか。

多少の好奇心はあったものの、

「城に行かなきゃいけないくて」

「城に？」

「はい。あの、アリスにそこに行くように云われてて」

だから、老紳士の誘いには乗れないのだと、なるべく穏便に、やんわりと断れば、

「おお、アリスに城に行くよう云われているのか」

アリスに云われているのなら仕方がないと、老紳士。

あつさりと引き下がら、

「しかし、アリスが城に誰かを呼び出すとは。お前さん、ナニモノだい？」

と、とても不思議そうに首を傾げて見せた。

それはこちらが聞きたいことだと、

「アリスが、城に誰かを呼びだすのは、珍しいことなんですか？」

と、逆に問うてみたところ、

「そりゃあ、お前さん。アリスが誰かに対し城へ行けと云ったと云うことは、アリス自身も城へ行くと云うことじゃ。アリスが城へ行くと云うことは、この世の終わりが始まると云うことだ。何せ、終わりは始まりを意味し、アリスは裁判に掛けられ、判決を言い渡される。その首を刎ねてしまえ！ とな」

こうした、謎の答えが返って来た。

「もう、儂らは、何度その光景を見てきたことか」

「はあ」

「今回も、無事に何も終わらなければ良いが」

それはどう云う意味かと問いたいところだが、問うたところで答えが返ってく

るとは思えない。

また、返って来たとしても、此方には理解出来ない、解らない答えが返って来る可能性も捨てきれないのだ。

「ああ、お前さん、城へ行くなら急いだ方が良い。少しでも、あのお方の機嫌を損ねたら、アリスより先に、お前さんの首が刎ねられてしまうからのう」

老紳士の言葉の意味が解らなくても、

「はあ」

と、白兔は頷くだけだった。

「そうそう、城に行く前に、帽子屋のところへ寄って行くが良い。きっと、その身体を元に戻す菓子が置かれているはずじゃ」

「帽子屋、ですか？」

何故に帽子屋のところなのか。

それとも、そう云う屋号の店があるのか。

そう云えば、この非現実セカイにおいて、冒険者用のアイテムを売っているNPCの店の名前が、『帽子屋』だったなと思いつつ、

「そこへはどう行けば？」

「昼の一時半になったら、六時になるじゃろ？ そうしたら、何処かの家の庭先に現れるはずじゃよ」

と、これまた要領の得ない答えが返って来たものだから、

「はあ」

と、白兔は頷くことしか出来ない。

「まあ、後はお前さんの運次第じゃろうが」

それは、今までの言葉と比べれば、大分的確な言葉であるが、ある意味で一番曖昧な言葉でもある。

「何で、運が必要なんですか？」

「何事にも、運は関係してくるぞい」

良く考えてみるが良いと、老紳士。

今の白兔の身長はだいたい、6cm前後。

もし、誰か人に声を掛けたところで、気付く者は全く居ないと云って良いだろう。

それだけではない。

普段は何でも無い、取るに足らない全てのものが、己の命を奪う原因になりかねないのだ、と。

例えば、雨が降って来たら、その雨粒で。

例えば、風が吹いて来たら、その風圧で。

例えば、小鳥が餌を探す為に地を啄んだ際、嘴に啜えられて。

例えば、地を歩く人々が我々の存在に全く気付かず、踏みつけられて。

等々、尽きることなく続く例え話は、生々しく恐ろしい。

因みに、この例え話は、老紳士が目の前で見てきた友人達の最後だと云うから、それは例え話ではないのでは、と、突っ込みたくなる。

「まあ、アリスに城へ行けと云われているのだから、そんな心配は要らんじやろうが」

カッカカッと、何処ぞのご隠居のような豪快な笑い方をする老紳士に、要らぬ心配なのであれば不安になるようなことは何も云わないで欲しいと、そう云いたくなった。



が、

「道中気をつけての」

と、云った老紳士が、飛んできた巨鳥の足に掴まれ、青い血を滴らせながら、断末魔の叫びと共に何処かへ連れ去られたのを見て、白兔は背筋を凍らせると同時に、言葉を失った。

【この続きは、本編で】

雑多に歪んだめるへん小説よせあつめ

ARICE 不完全版 お試し用

発行 2019/10/01

サバ織り定食◇日向 豊光

アシスタント◇枝豆@下町

イラスト ◇深谷飛鳥様

連絡先 sabaoriteishoku@gmail.com

Twitter @Houkou\_Hyuuga

【禁】本作品の一部、或いは全文を無断で、複製・転載・配信・送信・電子データ化・電子書籍化・ホームページ上等に掲載すること、及び、本作品の内容を無断で改変・改竄をすることを禁止します。